

トビイロウンカによる被害の発生に備えましょう

水稲の重要な害虫であるトビイロウンカによる被害が、2020年に西日本を中心に全国で多発しました。滋賀県でも、晩生品種や飼料用米において県全域で坪枯れ症状（吸汁により枯死したイネの倒伏）が発生しました。海外から飛来するため、毎年発生するとは限りませんが、発生すると大きな被害となる可能性があります。生態や防除法について理解し、今後の発生に備えましょう！

トビイロウンカ（学名：Nilaparvata lugens）の生態について



出穂期以降に多発すると、坪枯れ症状が発生します。本虫は枯れたイネから隣のイネへ移るため同心円状に被害が広がり、ひどい場合には、ほ場全体が枯れます。



成虫には、移動能力の高い長翅型と、移動能力は低い繁殖力の高い短翅型があります。

- 【特徴】 ●成虫の体長は4～5 mmで、油ぎった褐色をしています。
- 成虫には長翅型と短翅型があります。飛来してくる成虫は全て長翅型で、ほ場で増殖する雌は短翅型が多い傾向にあります。
- 【国内での発生】 ●近年では、2019年、2020年に本県で坪枯れ症状が発生しました。特に、2020年には西日本を中心に全国で多発し、24府県が病害虫発生注意報や警報を発表しました。
- 【生態と被害】 ●日本では越冬できません。梅雨期に、長翅型成虫がジェット気流に乗って中国大陸から飛来してきます。本県まで飛来するかどうかは、年によって異なります。
- ストロー状の口でイネを吸汁加害します。飛来した成虫が繁殖し、数を増した第2世代成虫と第3世代幼虫の吸汁によって坪枯れ症状が発生します。
 - 主に株元に生息するため、発生を見落とすことがあります。
 - 飛来時期が早いと被害が大きくなる傾向があります。本県では、7月上旬までに飛来した場合、早生品種で大きな被害が発生する可能性が高くなります。

調査と防除法について

ポイント

県内での発生状況の把握



自ほ場での発生状況や時期に応じた防除

調査

- 病害虫防除所ホームページの情報を確認し、県内での発生状況について把握します。県内での発生や飛来が確認された場合、特に注意が必要となります。
- 本虫の早期発見に努めます。ほ場全体を見渡して、坪枯れ症状の前兆となる黄化症状の有無を確認します。黄化が認められた場合、株元をよく観察して本虫の有無を確認します。

防除法

- 薬剤散布**：粉剤や液剤を使用する場合、収穫前日数に注意し、**本虫のいる株元に薬剤が十分かかるように散布**します。斑点米カメムシ類を対象とした防除では、株元に薬剤が届かない場合があります。農薬使用時にはラベルをよく読み、適切に使用します。
- 早期刈り取り**：収穫前で薬剤散布ができない場合、収穫適期の範囲内で早めに収穫します。